

NPO法人 LOOB JAPAN



代表理事

小林 幸恵

フィリピン／東京都

日本とフィリピンの青少年を対象としたワークキャンプやスタディツアーの開催、フィリピンの貧困層の子どもたちの就学支援、マングローブの植林やフェアトレード事業などを行っている。代表理事を務める小林幸恵さんが学生時代にフィリピンでのワークキャンプに参加したことで、自身が大きく成長したと感じ、異文化体験は青少年の健全な成長と、ひいては世の中から貧困と戦争を減らす最良の手段になるのではと強く思ったことから、2001年に3人のフィリピン人とともにパナイ島イロイロ市にNGOとして設立し教育活動を始めた。ワークキャンプやスタディツアーは独自にプログラムを開発。その数は年間20以上で、現地やオンラインで開催し、日本の高校生・大学生などに海外研修の場を提供している。その収益がイロイロ市の貧困層の子どもたちの学資やコミュニティ開発の原資となっている。プログラムに参加した若者が、インターンとして戻ってきたり、ソーシャルビジネス会社を起業したりして活動で連携するなど、経済的自立と循環的な人材の創出という社会貢献のモデルを築いている。またグローバル社会において、地球規模で解決していくべき貧困や環境汚染といった課題に立ち向かう若者の育成にも力を入れ、成果をあげている。

(推薦者：静岡県立大学 国際関係学部教授 高畑 幸)

こんにちは。フィリピン国際協力NGO LOOBの日本事務局LOOB JAPANです。

この度はご推薦いただき、このような光栄な賞を受賞させていただき、誠にありがとうございます。

LOOBは2001年にフィリピン・パナイ島イロイロ市で立ち上げ、“一方的な支援ではなく、現地の人と共に学び成長する”をモットーに活動しています。

教育支援・青少年育成・コミュニティ開発の3本柱で多岐に渡る活動を行っておりますが、その原点にあるのは『協働体験』です。創業者・小林幸恵が学生時代にワークキャンプに参加し、寝食を共に過ごしながらか一緒に汗水たらし協働する、この体験を広めたいという思いから創立しました。

創立当初はワークキャンプを多く開催しており、その開催地となった村が農村や漁村といったフィリピン社会の中で貧困コミュニティといわれる村でした。その村の住民たちが抱える様々な社会課題に向き合うことにより、活動の幅が広がり、現在の3本柱『教育支援、青少年育成、コミュニティ開発』に展開しております。

現在は事業の中で特に『青少年育成』に力を注いでおります。今後大きく成長・発展するといわれるフィリピンの若者たちに様々な経験を提供し、グローバルな社会においてユースリーダーとして活動できるリーダー育成を実施しています。

ごみ処理場があるコミュニティに住む青少年もおり、数年前よりZWAP (Zero Waste Advocacy Project) というプロジェクトに取り組んでいます。資源循環型社会を目指すためには、市民への啓発活動が不可欠です。

本プロジェクトではユースたち自らが、学校や企業などでワークショップを展開し、その地域のユースリーダーとして活躍し、村の子どもたちにとってのモデルケースとなっております。

青少年育成はフィリピンに限った話ではありません。LOOBでは旅行会社と提携し、数多くの日本の高校生・大学生のスタディツアーの受入れや、日本人の大学生インターン生の受け入れを行っております。日本の若者にも協働体験を提供すると共に、グローバルユースリーダーとして未来の日本を引っ張って行ってほしいと切に願っております。

そのために日本とフィリピンで活動するNGO / NPOとしてできることを最大限に取り組みまいります。今後とも応援を何卒よろしくお願いいたします。



▲SDGs研修 日比の青少年による国際理解学習



▲Waste Recyclerによるガイドツアー



▲カラファン地域のジュニアリーダー達



▲コミュニティ図書館 子どもたちへのノンフォーマル教育



▲フェアトレード商品をPRする子ども達



▲ユースによるビーチクリーンアップ

八王子国際友好クラブ (HIFC)



前代表

北田 玲子

東京都

八王子国際友好クラブ (HIFC) は同じ地域に暮らす外国人との相互理解を深め、国籍や民族、言葉の違いに関わらず互いを尊重し、共に育ち共に社会参画できる地域社会を目指す市民団体として、北田玲子さんが1987年に設立。北田さんが英国で生活した際、外国人向けに地域の情報提供や交流会などを行う団体や近所付き合いに助けられた経験が発足のきっかけ。市の広報紙を英訳した情報誌の発行から始め (後に7言語版発行)、1992年には公民館と協働で八王子で初の日本語教室を開始した。1991年に入管法が改正されると、より多くの外国人が生活者として同市にも居住するようになり、HIFCにも様々な相談事や依頼が寄せられるようになった。一市民団体では対応が難しく、より広範囲で外国人市民の暮らしの課題に対応できる組織の設置を市へ働きかけた結果、2008年に八王子国際協会 (HIFCは団体会員として加入) が設立され、以降それぞれの特徴を活かし役割を分担して活動することにより同市の多文化共生の街づくりに貢献している。HIFCでは現在、日本語教室の運営を行う「日本語グループ」、各国の文化や日本の文化を紹介する「交流グループ」、会員のステップアップのための「研修グループ」、会報ラポールやホームページの編集を行う「会報・ホームページ」、様々な話題を話し合い、考える「土曜談話室」や書道サロンなどの「サークル」の5分野で活動を行っている。(会員数：約170名、外国人、日本人ほぼ同数)

(推薦者：NPO法人 八王子国際協会 理事長 鈴木 宣行)

この度は、大変栄誉ある身に余る賞をいただきまして、心より感謝申し上げます。この度の受賞は、ご推薦下さいましたNPO法人八王子国際協会理事長鈴木宣行様と38年間にわたり地道に活動してきました延べ6,000人にのぼる会員の皆様のお陰とここに改めて御礼申し上げます。

1987年、同じ地域に暮らす外国の方々との助け合い、交流を通して相互理解や学びを深めたいというささやかな願いのもと、27名で八王子国際友好クラブを発足しました。翌年には会員は50名、5年後には150名、最大200名となり、40年近く前、他に類似する団体は行政にも民間にもなく、HIFCへの市民の関心の大きさに驚きました。

1991年の入管法改正に伴い、南米などから多くの日系人が働くために来日。地域には生活者として暮らす外国人が激増し、それと共に「日本語は教えていませんか」保健所や病院からは「通訳や付き添いお願いできませんか」、学校からは国際理解教育の依頼、「なかなかアパートを借りられない」などなど様々な要望や暮らしの困りごとが次々にHIFCに持ち込まれるようになりました。しかし一市民団体で解決できるはずはなく、活動を通して見えてきた社会のニーズや課題を行政に訴え、解決するシステム作りを要望し続けるとともにできることを実践してきました。

1992年2月には公民館と協働で八王子初の日本語教室を開始。翌年には再び協働で初の「ボランティア日本語養成講座」が開かれ、40人の募集に450人の応募！この講座受講者有志で日本語支援の会の設立を提案、現在の「八王子にほんごの会」が誕生。当時市の広報の翻訳版はなく、まず英語版から始め10年後の'97年からは多くの外国人会員の協力を得て7言語版の発刊を実現。(2010年に市に移行) 2008年には待ちに待った行政がかかわる八王子国際協会が設立され、HIFCでは解決できなかった広範囲な課題に取り組む組織ができたことは望外の喜びでした。設立に向けて八王子市とHIFCや

八王子にほんごの会などの市民団体が力を合わせ1年間準備をしたことは特記してよいことと思います。

現在日本語教室の運営、文化交流、研修、会報・HPなどを中心に直接外国人市民と日々接する活動をしています。会の運営や企画を担う外国人会員が増え、ますます多様な視点から活動内容を考えられるようになり、またおしゃべりの中では、日本での職場環境や母国の話に及ぶことも。厳しい世界情勢が身近に感じられ胸が痛むこともしばしばです。「話し合い、共感そして行動へ」を実践しているHIFC。これからも活動を通して感じたこと、見えてくることを関係機関と共有し、30周年の時に掲げた「共生そして創造へ」が実現されるよう、そして全ての市民の人権が尊重され、より住みよい街へと貢献していきたいです。



▲日本語教室



▲日本料理の会



▲浴衣を着る会



▲BBQ



▲書道サークル



▲日本語学習者「日本語で話そう会」

松川電気株式会社



代表取締役

小澤 邦比呂

静岡県

浜松市の電気・通信設備工事会社。1967年に松川電気店として創業、1973年に松川電気株式会社として法人化。電気設備事業を行う一般企業でありながら、社内に社会貢献活動部を作り、社会貢献活動に力を入れている。売上に関わらず、毎年一千万円を社会貢献活動費として使用している。年間の活動スケジュールを立て、年10日間の障がい者・子ども支援・被災地復興のための街頭募金活動。町内防犯灯の清掃と点検、プルタブ・エコキャップ収集、献血活動、外国人学校子ども奨学金や支援物資、子ども食堂・学校への寄付、盲導犬育成支援及びセミナーの開催、視覚特別支援学校（教材支援・弁論発表会開催・視覚障がい者校外実習受け入れ）児童養護施設・重度障がい者施設への支援物資や寄付、等々その活動は多岐にわたり、社員・家族・協力会社・顧客を巻き込んで、地域に恩返しをする活動に取り組んでいる。また、「社会貢献活動の拠点作り」と考え、浜松市が公募した地元で600年続いた旧鈴木家庄屋敷跡地再建計画パークPFI（公募設置管理制度）に参加、庄屋屋敷を改修してフレンチレストラン万斛庄屋敷「鈴松庵」を開業した。子どもたちや高齢者が自然や人とのふれあいを通じて、地域の輪を広げ、誰もが幸せを感じられるような拠点として、今後も社会貢献活動を発信していく。

（推薦者：学校法人 ムンド・デ・アレグリア学校 校長 松本 雅美）

「松川一家の活動そして今後」

この度は、大変心震える『社会貢献者表彰』を受賞させていただき誠にありがとうございました。今回弊社が第64回という長い歴史の中でも珍しい「株式会社」受賞とのことで心より感謝申し上げます。

1995年から弊社が地域に少しずつ恩返しをさせていただいて約30年ほどになります。その中での浜松駅北口ではじめた「子ども支援のための街頭募金活動」では、当初「松川電気の募金活動」は売名行為だと言われたことがありました。そのような中メガホンを持ち、声を出し道行く人に訴えかけるのは恥ずかしさもあり、どこか遠慮がちで消極的な姿勢が見受けられる社員もありました。しかし、「子どもたちの未来を支援させていただくんだ」という強い思いを持ち、全員参加で取り組み、年間10日実施目標の子ども支援募金活動、災害発生時の被災地復興支援募金活動などを継続して現在にいたっています。

今では、ホームページの活動実施案内をみてわざわざ募金に来てくれる方、自らが一生懸命貯めたお小遣いの入った貯金箱を持ってきて募金してくれる子供さん、募金にご協力をしていただく時に「松川電気さん、寒い中ありがとうございます。このホッカイロ皆さんで使ってね」と励ましの言葉をかけてくれる方、また昨年4月には募金活動がご縁で入社していただいた社員など、一つの活動の継続と信念が多くのご縁と素晴らしい世界をつくり出してくれています。私は社員には、「一生懸命働くこと、一生懸命社会に貢献することでその分の喜びが返ってくる世界を実感してもらいたい」と思っています。子どもたちには、「世の中捨てたもんじゃない、顔晴って（がんばって）いればきっと良いことが訪れる」といつも前向きでいてもらいたいと思っています。今後は、いただいた『社会貢献者表彰』を励みに、より地域に、また弱い者、か弱い者に寄り添う活動を継続して進めて参ります。

お天道様は、見ていてくれました。
「人生は邂逅と謝念、心から感謝」
ありがとうございました。

〈活動内容〉

街頭募金活動、外国人学校物質奨学金支援、視覚障害者支援弁論発表会開催、郊外実習受け入れ、盲導犬育成支援、盲導犬セミナー開催、児童養護施設支援、浜松フラワーパーク花育による花壇作り、重度障害者物質支援金、浜松市子ども食堂お米物質支援金、万斛庄屋敷鈴木家保存及び公園活性化支援 等々



▲2025年5月8日 街頭募金活動



▲2023年2月9日 ムンド校ブロッコリー収穫



▲2023年11月15日 中田島砂丘清掃



▲2024年6月5日 静岡県立浜松視覚特別支援学校 弁論発表者学資支援創立式典



▲2024年8月27日 支援センターわがぎ寄付活動



▲2024年12月19日 社会福祉協議会 お米や寄付金等

認定NPO法人 アジア車いす交流センター (WAFCA)



理事長

寺田 恭子

愛知県

Wheelchairs and Friendship Center of Asia (以降WAFCA (わふか)) は1999年に設立され、25年にわたり障がい児への支援を行ってきた。タイ、インドネシア、中国をはじめとするアジア諸国で、適切な車いすが手に入らない子どもたちに「移動の自由」と「希望」を提供している。2023年度1年間だけでも、タイとインドネシアに405台の車いすを寄贈し、107名に奨学金を贈っている。これまでに寄贈した車いすは、体の成長や障がいの進行度合いに合わせ、メンテナンスや交換も継続的に行う。車いす支援のほかに教育支援、バリアフリー化、国際交流の3つの社会的課題に取り組んでいる。奨学金制度を設け、障がいの有無に関わらず、子どもが自信と尊厳をもって自立できるよう交通費や教材費なども併せて支援し、提供した車いすで自宅から学校まで移動できるよう、使用する歩道の整備やバリアフリー化の推進、社会全体のバリアフリー化促進も同時に行っている。また、障がい児やその家族、専門家、支援者、若者世代の相互理解と支援レベルの向上のための交流事業や、WAFCA Athleteチームを作り、試合会場にブースを設け、チャリティグッズの販売やアスリートとの交流などの広報活動にも力を入れている。

(推薦者：認定NPO法人 アジア車いす交流センター (WAFCA))

第64回社会貢献者表彰式にて、公益財団法人 社会貢献支援財団様より過分な評価を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。また、長年にわたりWAFCAの活動を支えてくださった皆さま、そして現地スタッフの皆様のご尽力にも、あらためて深く感謝いたします。

認定NPO法人アジア車いす交流センター (WAFCA) は、創設から25年以上にわたり、タイとインドネシアの障害のある子どもたちが自立へと歩み、地域の一員として生き生きと暮らせる未来をめざして活動してきました。寄贈した車いすは延べ7,000台以上にのぼり、多くの子どもたちが「移動の自由」を手にしてしています。しかし私たちが届けているのは“移動手段”だけではありません。教育支援、家庭や学校のバリアフリー化、家族や地域を巻き込んだ包括的支援を通して、子どもが「通える・学べる・参加できる」環境づくりにも力を注いできました。

車いすは、現地スタッフと専門家が家庭や学校を訪問し、一人ひとりの身体に合わせて調整します。また、安全な移乗や姿勢づくりの指導を丁寧に行い、生活の質が向上するよう伴走します。その積み重ねにより、車いすをきっかけに登校が可能になり、友人と学べる喜びを取り戻した子どもたちは大勢います。

また、車いすは「健康づくり」と「社会とのつながり」を生む大切な道具でもあります。私は子どもたちが参加する合宿研修などで車いすダンスの指導を行っていましたが、家族や友人と音楽に合わせて楽しそうに踊る姿は、Well-being の実現に向けた確かな一歩です。

さらに、自治体職員、教員、リハビリ専門職等を対象とした研修会を継続し、地域全体の理解と支援力を高めてきました。家庭に寄り添い、地域と協働して支援を続ける現地スタッフの存在こそ、WAFCAの強さの源です。

表彰式では、全国の受賞者の志に触れ、人間の尊厳を守る活動が連鎖して社会を変えていく力を改めて感じました。この出会いは、WAFCAが積み重ねてきた歩みを振り返り、支援の根幹にある志をあらためて胸に刻み、さらに前進すべきことを教えてくれました。

支援を必要とする子どもたちがいる限り、私たちの活動は止まりません。「変わらないために、変わり続ける」という姿勢を胸に、教育・自立支援、バリアフリー環境づくり、健康の保持増進に向けた取り組みや国際交流、そして未来を担うリーダー育成にも一層力を注ぎ、アジアにインクルーシブな社会が広がるよう歩み続けてまいります。



▲車いすを寄贈



▲車いすを寄贈 (外務省フォトコンテスト受賞作品)



▲障がい児合宿研修



▲歩行器を寄贈



▲インドネシア特別支援学校



▲車いすの子どもと母親

NPO法人 J'One World



代表理事

小鳥 阿里

バングラデシュ／東京都

バングラデシュ出身の小鳥阿里さんが、同国でも特に貧しい地域、パプナ・チャットマハールの子どもたちに教育の機会を持ってもらいたいと、奨学金を贈る「ALI MILLENIUM FOUNDATION」を2000年に設立して活動を発展させてきた。2004年には認可外小学校を建設し、健康福祉、保健衛生、経済を循環させるために親たちにも教育を受けさせ、稼ぐための仕事や仕組みを作り、持続可能な生活環境を整備した。同年、魚の養殖事業のための養殖池の建設を開始。重機を使わず、全て手掘りで池を掘ることで、地域約300名の雇用を生み、お金を稼げる仕組みを作った。池の完成後は、養殖事業を展開し継続的な雇用を生み出した。現在は、約200名が稼いだお金を元手にして自営業を始め、安定した収入を得るようになった。その他、井戸の建設や生活相談、養殖した魚の糞を再利用し、無農薬農業も行うようになった。また、バングラデシュの学校を卒業した人に日本での仕事を紹介するプロジェクトや宮崎県でハラール和牛の輸出事業を支援している。今後はパプナ・チャットマハール地域に高度医療が可能な病院をつくることを目標にしている。

(推薦者：みんなのさいわい)

特定非営利活動法人J'One Worldは、アジア・アフリカを中心に厳しい環境下で暮らす人々の生活環境向上と経済発展に寄与することを目的に活動しています。この度、取り組みにご関心をお寄せいただき、機会を賜りましたことに感謝申し上げます。

私たちは、代表理事の出身地であるバングラデシュ・パプナ・チャットマハール村の最貧困層（アウトカースト）を受益対象として、2000年に有志団体として活動を開始し、2016年6月にNPO法人として設立しました。活動の特長は、単なる寄付に留まらず「直接支援」と「経済の自立」を重視し、地域に持続可能な自立基盤を築いてきた点にあります。

貧困の連鎖を断ち切るため、2004年には働く場所のない住民約300名の雇用創出を目的に、魚の養殖池を手掘りで建設し養殖事業を開始しました。この事業は現在も地域住民約3,000名に安定した食糧と収入源を提供しています。さらに2008年には、魚糞や鶏糞を活用した無農薬農業も展開しました。

教育面では、2000年に奨学金制度を設け、2005年にはアウトカーストの子どもたちのための認可外小学校を建設・運営し、親世代にも夜間学校で学びの機会を提供しました。また2006年には、有害物質層を避けた深井戸を整備し、安全な水を供給しています。

近年は活動を南アジア・アフリカへ拡大し、2021年からは日本への職業斡旋を行う人材派遣プロジェクトを開始、2024年には宮崎県産ハラール和牛の輸出支援事業およびリサイクル事業を始動しました。これらを通じ、住民は奪い合う生活から抜け出し、自らの生き方に誇りを持ち、夢や希望を描けるようになっています。

今後は住民の切実な要望である地域医療の実現を最優先とし、診療所開設に向けた調査・準備を進めています。将来的には、病院上層にコンドミニウムやホテルを併設し、

医療提供と経済活性化を両立する「コンドミニウム型コミュニティホスピタル」の建設を目指します。

加えて、貧困地域の若者への農業職業訓練や日本語試験対策を提供し、日本への技能実習生派遣を拡大することで、少子高齢化の進む日本と多子若齢化の進む発展途上国の共存という持続可能な社会の実現を後押しします。

私たちは、この活動を通じて、“誰もが安心して暮らせる社会”を実現するため、組織基盤を強化し邁進してまいります。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



▲安全な井戸から水をくむ様子



▲健康診断一体重測定



▲卒業した生徒が20年後先生になった



▲日本語学校で日本についてのレクチャー



▲認可外小学校で日本語を教える様子



▲養殖池建設中

一般社団法人 みずほの家



山中 泰子

兵庫県

兵庫県丹波篠山市の山中信彦さんと泰子さん夫妻は、24時間の見守りと介護が必要な重度の障がい者だった愛娘・山中瑞穂さんと暮らした自宅を改装し、障がい者の単独型短期入所施設「みずほの家」を2015年に開設。山中夫妻と長男、次男の家族4人が主体となり運営している。泰子さんの24年の介護経験の信頼と、家庭的な温かさが評判を呼び、1日定員12名が日々切れることなく、丹波篠山市を含む兵庫県内20市町から利用者が訪れる。その数年間のべ3,000名を超え、全国屈指の施設となる。医療的ケア児者、車いす肢体不自由児者、強度行動障がい者等、他の施設で預かり困難な人にも、質の高い専門職やスタッフを配置、原則お断りなく受け入れる。カバー範囲を広げ、ニーズに応えるため近隣周辺の開所希望者に無償で短期入所運営指導、現場実習を行い、兵庫県内にこれまで4つの新規短期入所施設の開所に貢献。また短期入所運営以外に、デイサービス、知的障がい者のグループホーム「ななつ星」も運営する。「ななつ星」は、利用者とその家族が地域社会につながり、地域のハブになるような場所を目指している。家族の思いから始まった「みずほの家」の開所から今年で10年、家庭的な短期入所施設は、障がい者福祉のあるべき姿として、さまざまな地域でその広がりを見せている。

(推薦者：社会福祉法人 丹波篠山市社会福祉協議会 会長 前田 公幸)

この度は、社会貢献者表彰という大変名誉ある賞を賜り、心より感謝申し上げます。このような機会を与えてくださった貴財団の皆さま、そして日々みずほの家の活動を支えてくださっている多くの皆さまに、深く御礼申し上げます。

受賞の順番を待つ間、これまでの40年間にわたる出来事が、走馬灯のようによみがえり胸が熱くなりました。

1985年8月25日、今からちょうど40年前、我が家に3人目の子どもが誕生しました。丹波篠山で生まれたその娘に、夫は豊かに実る稲穂の情景を重ね、「瑞穂（みずほ）」と名付けました。しかし、その喜びも束の間、10月に入ったある日、突然我が家に大きな試練が訪れます。生後わずか一か月半で、瑞穂はヘルペス脳炎という重い感染症に襲われました。医師から告げられた病状は厳しく、私たちは言葉を失いました。幸いにも一命は取り留めることができましたが、瑞穂はその後、生涯にわたり重い後遺症とともに生きていくこととなりました。そのとき私たちは、どのような困難があろうとも、この小さな命を守り、共に生きていこうと心に誓いました。

瑞穂は、24歳で天国に召されるまで、多くの方々の励ましの中で、懸命に、そして豊かに24年の人生を歩みました。娘を見送った後、私は夫や子どもたちとともに、瑞穂と同じように重い障害を持つ方々の力に少しでもなれたらという思いから、11年前に「障害者短期入所 みずほの家」を立ち上げました。その後、グループホームやデイサービス等を開設し、現在では多くの皆さまにご利用いただいています。

娘とともに過ごした24年、そして娘を失った後に始まった障害福祉の歩み。そのすべての時間の中で、私は娘から計り知れないほどの愛を受け取ってきました。その想いを胸に続けてきた私たちの活動が、同じように重い障害のある方やご家族にとって、少しでも安心できる場所となっていれば、これほど嬉しいことはありません。

私は今年、70歳（古希）を迎えました。これからもみずほの家の一員として、皆さんとともに、この場所を大切に守っていきたいと思っています。



▲開設初期 重度障がい者の食事介助を行う泰子さん



▲2015年3月1日 障害者短期入所施設開設



▲開設当時から10年間、送迎業務も担当する泰子さん



▲2025年8月6日 皆でスイカ割に挑戦



▲2025年8月6日 子どもたちと楽しく過ごす



▲重度障がい者の子どもを持つ母親たちを支援する泰子さん（右から4番目）

NPO法人 徳之島虹の会



理事長
政 武文

鹿児島県

沖縄島北部、奄美大島などの琉球諸島の離島と共に、生物多様性が評価され、2021年に世界自然遺産として登録された徳之島は、日本の0.7%の面積に対し、国内の20%もの動植物が生息する地で、鹿児島県の島。先立つこと10年前2011年に発足した徳之島虹の会は、徳之島の自然環境保護を目的に、島の子どもたちには環境教育や山歩き、外来種駆除を、来島者には徳之島の自然知ってもらうためにエコツアーやナイトツアー、ウミガメ講習会、海外の小学生と島の小学生のオンライン交流会の開催等を行っている。また、固有生物オビトカゲモドキや、奄美大島と同様に徳之島にも生息するアマミノクロウサギをはじめとする希少野生動植物の保護パトロールや、希少種成育調査等も行い、データを全国の研究者に提供している。会の名前になっている“にじ”は徳之島では“仲間”という意味で、“虹の会＝仲間の会”。生物多様性を守るための要は、活動に多くの市民が参加することと考え、“何はともあれ、まずは知る、そしてやる、残す、引き継いで渡す”をモットーに、徳之島の自然や文化を守り伝えている。

(推薦者：明治大学専門職大学院 ガバナンス研究科教授 長畑 誠)

徳之島は2021年に世界自然遺産に登録された、鹿児島県本土と沖縄県本島の間にある島です（世界自然遺産「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」）。

世界自然遺産に登録された4島のなかで最も小さく、また遺産エリアのすぐ隣に人の暮らしがあり、人間活動の影響を受けやすい環境があります。

徳之島には約3万年前から人が住んでいたと云われながら、今なお豊かな自然があるのは人々が自然環境と共生する暮らしを営んできたからで、自然と人の暮らしは不可分なものであると考えています。

徳之島は「子宝の島」とも云われ、全国でも合計特殊出生率が高い地域です。島内の殆どの小学校では、運動会などに集落民の多くが競技や総踊りに参加するなど、地域コミュニティ力がまだ残っています。

それでも最近は、ゲームやSNS等に多くの時間を割く子どもたちが増えていて、殆どの若者は高校を卒業すると進学や就職で島を離れていきます。

日本全体で過疎化と高齢化が進む中、集落（地域コミュニティ）内での助け合いや共同の力を維持するためには、そこに住む人々自身が地域の宝（自然・歴史や文化、ひと）の持つ価値を認識して誇りをもち、協働して守り伝えていこうという気持ちと行動が大切です。

そのため、子どもたちが島を離れる前に、島の自然や文化の豊かさとその魅力を認識し、郷土愛を育んでもらいたいと願い、活動を続けています。

当会は今後も、子どもたちを主に若い世代の島人たちが、徳之島の自然・歴史・文化の豊かさに気づき、世界自然遺産の森やその周辺地域の自然保護活動および地域の文化や暮らしの知恵・生活の工夫などの保全・継承を活発に行うようになることを目指します。

基本は、「知る」(座学) ⇒ 「考える」(ワークショップ) ⇒ 「実践する」(野外授業) ⇒ 「実践結果のまとめと発信」(発表や島内外との交流等) という流れで環境教育を実施し、単発の体験活動では終わらせず、深い学びに誘います。また地域の区長や青年団、こども育成会、女性連なども協働して、自然と共生し続けていくための知恵を活かした遊びや食などの文化を再発見し、体験する活動を企画・実施していきます。

これらの活動を通じて、学業や就職で島を出ざるを得ない若い世代の「島人」としてのアイデンティティを確立し、「自然と共生する人の暮らし」が未来へと受け継がれていくことを考え続けて実行し続けます。



▲シロアゴガエル駆除作業 (学生ボランティア)



▲ムヨウランなどの小さな希少種を探す様子



▲世界遺産登録記念エコツアー集合写真



▲世界遺産登録地野外授業



▲着生ラン (絶滅危惧種) の移植作業



▲里地のゴミ拾い (ボランティア)

認定NPO法人 シャイン・オン・キッズ



ハンドラー・リーダー
森田 優子

東京都

日本に20年近く暮らし、2歳を目前にした息子を小児がんで亡くしたタイラー・フェリス君の両親、キム・フォーサイスさんとマーク・フェリスさんが2005年に設立した「タイラー基金」を前身に、小児がんや難病などの長くつらい入院治療中でも、子どもたちが笑顔を忘れずにいられるような活動をしたと2012年にNPO法人シャイン・オン・キッズとして活動を開始。特に日本で初めて導入された「ホスピタル・ファシリティドッグ」の活動で知られている。ホスピタル・ファシリティドッグは、約2年間専門的なトレーニングを受けた犬が病院に常勤し、ハンドラー（ペアを組む臨床経験のある看護師）と共に、子どもたちが治療や検査を受ける際の付き添い、手術室への移動に同行、リハビリ支援や治療以外の時間でも寄り添い子どもたちや家族を癒す。既に静岡県、神奈川県、東京都の病院で4頭が導入されており、8病院が導入を待っている状況。日々の治療、検査、症状などの出来事をカラフルなビーズで記録するアート介入療法「ビーズ・オブ・カレッジ」や、長期入院治療経験の子どもと、そのきょうだいを対象とした情報発信のコミュニティ「シャイン・オン！コミュニティ」、小児がん経験者の長期フォローアップにつながるキャリア支援の「キャンプ・カレッジ」など、入院だけでなく、退院後の生活を含めた完全なサポート体制を構築することを目指して活動している。

(推薦者：静岡県立こども病院 院長 坂本 喜三郎)

このような名誉ある賞を頂き、身の引き締まる思いです。

心より感謝いたします。

シャイン・オン！キッズは、共同創業者キンバリ・フォーサイスとマーク・フェリス夫妻が、2歳目前に息子タイラーを亡くした経験から、2006年に東京で設立しました。タイラーは生後1か月で小児白血病と診断され、ほとんどの時間を国立成育医療研究センターで過ごしました。病気と向き合う息子の姿と、長く支えた経験が、同じ状況の子どもと家族を支援したいという決意につながりました。

日本の医療制度では長期入院費用が手厚くカバーされています。しかし、重い病気と向き合う子どもにとっては大きな試練である上、家族や友人、「普通の生活」から離れることは精神的負担になります。日本の高度な医療ケアによって多くの子どもは回復しますが、長期の後遺症や辛い治療が退院後の生活や心身に影響することもあります。

当法人は、入院直後から退院後まで子どもと家族を支援しています。治療中の精神的サポートは不安やトラウマを和らげ、レジリエンスを高め、退院後の健やかな暮らしにつながります。現在、全国36の医療施設でエビデンスに基づくプログラムを提供しています。

中心的活動のひとつが2009年に日本で初導入されたホスピタル・ファシリティドッグ®プログラムです。子犬は約2年間の専門トレーニングを受け、臨床経験のある看護師であり、研修を受けたハンドラーとペアを組みます。病院で医療スタッフの一員としてフルタイムで活動し、治療や検査、手術やリハビリに寄り添い、子どもや家族、

病院スタッフに癒しと笑顔を届けます。現在、静岡・神奈川・東京の4病院で5チームが勤務し、今後3年間で毎年3チーム以上を導入、2026年には関西の病院にも導入予定です。

また、アメリカ発のアート介入療「ビーズ・オブ・カレッジ」プログラムも全国34病院で提供しています。子どもたちは医療ケアを象徴するガラスのビーズをつなぎ、これまでのプロセスを振り返り、意味を理解してレジリエンスを高めます。つながったビーズは治療に立ち向かった「勇気の証」です。治療を終えた小児がん経験者の交流プログラムもあり、「キャンプカレッジ」では年上の経験者が年下や家族とつながり、「こども企画室」ではプログラムの“卒業生”が啓発や資金調達など社会貢献活動に取り組んでいます。

こうした活動を通じて、シャイン・オン！キッズは入院から退院後まで、病気とたたかう子どもと家族を包括的に支援し、皆様とともに社会課題に取り組んでいます。



▲点滴の応援



▲歩行リハビリへの寄り添い



▲ゲーム感覚でのリハビリ支援



▲ベッドでの添い寝



▲子どもと一緒に昼寝



▲鎮静に寄り添い恐怖心をやわらげる

NPO法人 にほんご豊岡あいうえお



事務局長

岸田 尚子

兵庫県

兵庫県北部の但馬地域（3市2町／豊岡市、朝来市、養父市、新温泉町、香美町）の人口およそ15万人に対して、外国籍住民は2,067人（2023年時点）。2013年からおよそ2倍に増加、国籍も多様化している。一番外国人が多い豊岡市を中心に2012年から但馬地域で暮らす外国人、外国にルーツのある子どもに対して、日本語教室、生活相談、交流活動を行い、相手のルーツを尊重し、互いに助け合える居場所づくりに取り組んでいる。日本語教室は子どもから大人までを対象に初期適応、初級から上級、日本語能力試験対策のクラスがあり、月曜から日曜の朝・昼・夜の毎日開催。小学生から高校生までは無料。さらに加え子どもの学校の取り出し授業、技能実習生を雇用する企業へ出張授業も行う。外国にルーツを持つ子どもや保護者が、地域の学校や進学、日本の教育制度について理解できるよう、5か国語に翻訳した子育てチャートを作成。就学に役立てて希望が叶うように後押しする。登録外国人は116名。中国、フィリピン、ベトナム、ドイツ、アメリカのほか、ネパール、ミャンマー出身者はこの数年で増加。日本語教室でのボランティアも養成、参加費は無料で、全10回の講座を年2回実施。現在22名が活躍する。豊岡市内で他団体と協力し、多文化交流サロンを毎月開催。ゴミの分別や自転車のルール、日本の文化、季節の行事、防災を学ぶ機会を提供。さらにお茶会やカフェなどで交流の場を設け、生活相談にも繋げる。「何かあったら来てね」ではなく、「何もなくても来てね」を合言葉に、外国にルーツを持つ人々が安心して暮らせる地域づくりに貢献している。

（推薦者：豊岡市）

この度は、社会貢献者表彰式典において、たいへん栄誉ある賞を賜り、厚く御礼申しあげます。また、推薦いただきました豊岡市や、選考委員の皆さまに心より感謝申しあげます。

NPO法人にほんご豊岡あいうえおを設立して13年あまり、活動を始めてから30年になろうとしています。このような節目にすばらしい賞をいただき、心から嬉しい思いとともに、この賞を次へつなぐ出発点として、これからも歩みを止めず活動を続けていきたいと気持ちを新たにいたしました。

私たちの活動は、1995（平成7）年の阪神淡路大震災の教訓から、1996（平成8）年に当時の豊岡市国際交流協会が日本語教育ボランティアスタッフ養成講座を開催し、その修了者が中心となって日本語教室を始めたことに端を発します。豊岡市国際交流協会は姉妹都市提携に向けて設立されましたが、「草の根の交流も忘れずに」という思いのもと、地域に開かれた活動を大切にしていました。

当時はまだ外国人市民も多くはありませんでしたが、それでも様々な課題に直面し、スタッフと「何か良い解決策はないだろうか」と悩むこともありました。急上昇できなくても低空飛行でも良いから、とにかく継続していこうと話し合い、自分たちの活動は「好きだから」ではなく、社会課題に向き合う取り組みなのだという自負を持ち続けてきました。

外国にルーツを持つ人々に対して日本語教室をはじめとする生活支援事業を行ってきましたが、その根底にあるのは、言語や文化などの壁をこえた、地域住民同士のつながりづくりを実現したいという思いです。

この活動は、相手のルーツを尊重し、互いに協力し、助け合うきっかけをつくるためのものであり、「〇〇人」ではなく「〇〇さん」と呼び合える、暮らしやすい地域環

境をつくることを目指しています。外国にルーツを持つ人々が住民として地域に根付き、私たちと同じように安心して暮らせることを願っていますし、それは同時に、私たち自身の豊かさにつながるものでもあります。

まずは「ひと」として対等であり、嬉しい時はその嬉しさを分かち合えば、喜びは倍になります。悲しい時はその悲しみも分かち合い、支え合うことができます。互いの思いを分かち合い、共有できる社会であってほしいと願っています。私たちは血はつながっていませんが、1つのファミリーとして互いを思い合い、助け合っていきたいと思います。

私たちの合言葉である「何か困ったことがあったら来てね、ではなく、何もなくても来てね」の精神のもと、互いに助け合える社会の実現を目指して、今後も活動してまいります。

これからも、ご協力・ご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



▲親子クラス



▲水餃子@花見



▲日本語教室



▲クリスマスパーティー



▲ダンスワークショップ



▲子どもクラス

NPO法人 子どもセンターぬっく



理事長

玉野 まりこ

大阪府

虐待や貧困、非行等の理由で家庭での居場所がなくなった10代後半の子どもたちが体を休めて心を癒せる生活の場を保証するために、弁護士や関係者が2015年に「子どもセンターぬっく」を設立し、大阪で初めての子どもシェルター「ぬっくハウス」の運営を始めた。2017年には居場所のない子どもたちの相談を受け付ける無料電話相談を開始。子ども本人や周りの大人からの相談を受け付け、緊急保護が必要な子どもについては、行政機関やその他の団体とも連携して、一時保護所やぬっくハウスへの入居に繋げている。2020年にはぬっくハウスを退居した後の居場所を想定した、自立の準備を行う女子専用の自立援助ホームRe-Co（りこ）を開設。2023年には男子専用の自立援助ホームMa-Co（まこ）を開設した。ぬっくハウス、Re-Co、Ma-Coの施設も24時間365日スタッフもしくはボランティアなどの大人が常駐し、子どもたちが安心・安全に暮らせるよう見守っている。ぬっくに相談したり、ぬっくが運営する施設に入居した子どもには、原則全員に子ども担当弁護士（コタン）が付き、子どもの声を聴きながら、時にはつまずきにも寄り添い奔走している。子どもを真ん中に置き、関係する大人がチームとなって、息の長い支援を行うことを大切にしている。

（推薦者：NPO法人 児童虐待防止協会）

この度は大変栄誉ある賞を賜りまして、誠にありがとうございます。このような表彰をしていただき、とても光栄であるとともに改めて身の引き締まる思いです。

NPO法人子どもセンターぬっくは、設立10周年を迎えることができました。緊急一時避難所としてはじまった子どもシェルター「ぬっくハウス」を出発点に、中長期的な生活支援を行う自立援助ホーム「Re-Co（りこ）」「Ma-Co（まこ）」、さらにアフターケアと、活動の幅を少しずつ広げてきました。振り返れば、あつという間の10年間でした。

ぬっくハウス開設当時は15～19歳だった子どもたちも、今は20代後半となりました。ぬっくハウスを退居した後のあゆみは様々です。進学や就職をしたけれど続けることが難しくなり生活困窮に陥ってしまった子、それまでの環境から離れて自分の好きな道に進んだ子、ひとりで出産をした子、いったん離れた家族との関係を再構築している子、アルコールや薬を過剰摂取してやめられない子…決して平坦な道ではなかった子も少なくありませんが、それでもみんな自分の人生を一生懸命に生きています。

自立援助ホームRe-Co、Ma-Coの子どもたちは、高校通学やアルバイトなど、それぞれのペースで頑張っています。時には大人とぶつかってしまうこともあります、さまざまな形で自分の思いを出しながら、どの子も自立に向かって歩みをすすめています。退居後のアフターケアも大切にしています。子どもたちが困った時に、「ピンチ！ どうしよう～」と相談してもらえる存在でありたいと願っています。

子どもセンターぬっくは、運営委員・スタッフ・コタン（子ども担当弁護士）・ボランティアのみなさん一人ひとりが、子どもたちと一緒に悩み、笑い、時には立ち止まりながら、一緒に築いてきた場所です。そして、この10年という節目を迎えられたのは、さまざまな形でご支援くださっている多くの方々や、地域のみなさまの温かいまなざ

しがあったからこそです。活動を見守り、励まし、寄り添ってくださったすべての方に、心より感謝申し上げます。

これからも、常に子どもをまんなかに置いて、子どもと対話しながら、時には失敗にも寄り添いながら、子どもたちが将来に希望を持てるような居場所をつくっていきたいと思います。今後とも、変わらぬご支援とあたたかいご協力を、どうぞよろしくお願い申し上げます。



▲活動イラスト



▲シェルター個室



▲誕生日のごちそう



▲コタンアフターケア



▲ボランティア交流会



▲運営委員

NPO法人 Support for Woman's Happiness



理事

石原 ゆり奈

ラオス／東京都

ネパールやラオスで教育支援を行ってきた石原ゆり奈さんが、2017年にラオスの障がい者のエンパワメントを目的に設立したNPO法人。ラオスでは福祉の仕組みが乏しく、障がいのある人は誰かに頼って生きていくのが当たりまえとなっていた。しかし「働いた収入で暮らせるようになりたい」と思っている当事者が多いことを知った石原さんは、ビエンチャンに障がい者が仕事をし、共に暮らす作業所「ソンパオ」を開所。民族文化と障がい者雇用を守ることを意識し、ラオスに50ある少数民族の女性たちが作る織物を使用して、障がいのある女性たちが良質のハンドクラフト商品を日本企業から受注し、訓練しながら製作する仕組みにした。また、土壌の良いラオスで青い花「パタフライピー」を有機栽培し、日本企業に出荷する取り組みも開始。花から抽出した青い着色料を使った製品を御殿場、美瑛、宇都宮の就労継続B型作業所と協力し支えあって製造している。作業所の開設から7年目2024年の1月にリーダー育成の一環としてラオスから3人が来日し、研修を行った。日本の工房や工場、障がい者雇用の現場の訪問、車椅子を使って電車の乗り継ぎなど様々な体験をした。石原さんは、そうした体験を経てリーダーが育ち、次世代に引き継がれ、やがてはラオスの福祉を動かす力になることを希望している。

(推薦者：一般社団法人 Social Compass)

東南アジアのラオスで障がいのある方達の作業所を開き、ものづくりと農業を教えています。NPO法人Support for Woman's Happinessです。

長年、教育支援で現地に入っていましたが、学校を作っても障がい児は学校に来ることが出来ていないケースが多く、学校に通う機会のないまま大人になった彼らは家族や親戚など限られた範囲との関わりの中で暮らしていました。

自分で働けるようになりたい。家族を支える側になりたい。そんな彼らの希望を聞き、2017年に小さく障がい作業所を開いてものづくりを教え始めました。

これまで場とチャンスがなかったからです、一人一人の成長は目を見張るものがあります。支えられる側から支える側に立つことができる喜び、自分で決める主体性、人にとって大切な尊厳がそこにはありました。

ラオスの手紡ぎ・手織りのコットンを洋服やバックに仕立てる仕事から、青い花パタフライピーの栽培収穫、日本の福祉事業とコラボしての製品作り、竹うちわの生産など、できるだけ多くのメンバーにチャンスが行き渡るよう考えながら進めています。

日本の福祉事業所とのコラボ製品はラオスの障がい者雇用を支えるだけでなく、日本のB型事業所の工賃UPとやりがいUPを目指し協働するプロジェクトです。

ラオスにはまだ福祉の仕組みが十分ではないため障がい者年金や就労機会などの支援がない部分を、自分たちで作り出していく必要があります。

ラオスの福祉を作っていく側に立てる当事者を育てていくためにも年に1度来日して福祉事業所をまわり、当事者の方達や職員の方達との交流勉強会を実施しています。

みなさんとも全国のどこかでお会いできる機会があると嬉しいですね。

今回の受賞にあたり、日本・ラオスのメンバーが喜び誇りに思えたことも勿論ですが、何もない時代から信じて応援し続けてくださるサポーターの皆さんに唯一できる恩返しだと思っています。

可能性を信じて待っていてくださる皆さんに支えてもらい、作業所は9年目を迎えます。まだまだ課題は多くありますが皆さんの心に届けられるよう真摯に活動していければと思います。

この度は素晴らしい賞を授与くださり、ラオスと日本の福祉支援活動に耳を傾けてくださり本当に有難うございました。

いつか現場が自立し私たちがいなくても運営していけるようになる日に想いを馳せながら引き続き頑張ります。有難うございました。



▲来日・美瑛町長表敬訪問



▲レンテン族生地製品



▲作業所での手仕事



▲作業所のくらし



▲竹うちわ作りの研修



▲美瑛訪問

NPO法人 Colorbath



代表理事

吉川 雄介

福岡県

日本、ネパール、マラウイを活動のフィールドとして、教育事業と雇用を生み出すソーシャルビジネス事業に取り組んでいる。ネパールのストリートチルドレンや孤児院の支援を行っていた任意団体が前身で、2013年に日本とネパールの中学生の国際交流プログラムを実施したことから始まり、2016年度にNPO法人となった。創設者で代表理事の吉川雄介さんは、大手教育系の民間企業に勤務していたことがあり、日本の学校現場の教育課題が①グローバル化を見据えた教育が、欧米だけの英語学習に偏っている事が多い。②学校ごとで、教育の特色を出すことの一方で、先生は多忙で、海外の学校とのネットワーキングやプログラムの調整をする時間が少ない。③海外の学校とのWeb交流が行える時代になったが、技術がない、英語に自信がない、海外の学校とつながりが無い、ということを経験に子どもたちが世界とつながる機会が少ない。これらの課題の解決と持続可能なプログラムの開発を吉川さんが持つノウハウとアイデアをアレンジし提供している。また、ネパールやマラウイでのフィールドワークや現地の子どもたちを日本に招待するグローバルプログラムも実施。ネパールではコーヒーの栽培から販売まで一貫した取り組みを続けて現地の雇用を創出している。

(推薦者：NPO法人 Colorbath)

私たちColorbathは、「ひろがれ、セカイ」をコンセプトに掲げ、アジアやアフリカで教育やソーシャルビジネスに取り組んできました。今回、このような栄誉ある賞を受賞できたことは、私たちだけの力ではなく、国や文化を越えて関わってくださった多くの方々のおかげです。心より感謝申し上げます。

ネパールでは、農村部に仕事がないがゆえに、出稼ぎに行かざるを得ず、家族と一緒に生活することのできない若者が多くいます。そこで私たちは、農家さんと一緒に、海外へ輸出できる高品質のコーヒー・茶葉・スパイスの生産に取り組んできました。

マラウイでは、電気やガスが十分に普及していないために、子どもたちの中には、毎日5時間かけて薪を運ぶ重労働にあたり、学校に行くこともままならないケースもあります。私たちは、太陽の熱を反射させてお湯を沸かすことができるソーラーボイラーを現地で製造し、病院や学校に届けることで、人々の生活と子どもの未来、森林環境を守る活動を続けてきました。

そして、ここ日本では、学校教育の中で伸び伸びと自分を表現できる機会が少なく、視野を広げて前向きになることが難しい多くの子どもたちと話をしてきました。私たちが実践しているWeb会議システムを活用したオンライン交流は、「英語が苦手」「外国に行ったことがない」といった子どもたちでも、海外の同世代とつながり、世界の広さと豊かさを知ることができるプログラムです。

食料問題、エネルギー問題、環境問題、教育問題。

課題はまだまだ尽きません。一方で、さまざまな方と出会い、連携してきた経験から、私たちは「1人の100歩より、100人の1歩」を信じるようになりました。自分たちだけでこの世界を変えようとするのではなく、この社会で同じときを生きる多くの人とつながり、想いをひとつに、一緒にカタチにして、未来をつむいでいく。

自分たちが実践者、挑戦者としてソーシャルビジネス事業づくりに取り組むこと、

そしてその学びをもとに「セカイのみえ方を広げる」学びのプログラムを多くの方々に届けていくこと。

この二つのアプローチを通して、私たちはこれからも社会の豊かさに貢献していきます。

一人ひとりの行動がポジティブに変われば、それは社会にも連鎖する。
そんな社会を自ら選択して生きること、よりよい未来が創られていく
世界を変えるような大きなことだって、
すべては好奇心と小さな一歩から始まっていくと、私たちは信じています。



▲マラウイ ソーラーボイラーで料理



▲Web交流マラウイ



▲マラウイ 課題解決型プログラム「フィールドワーク」



▲2012年 Web交流の様子



▲マラウイ



▲グローバルプログラム ネパール、マラウイ、日本の子どもたちとの交流

認定NPO法人 あっちこっち



理事長

厚地 美香子

神奈川県

芸術を届けたいプロのアーティストとそれを必要とする人をつなげ、芸術で社会を元気にする仕掛けを作っている。理事長の厚地美香子さんは、音大卒業後、国内最大手のクラシック専門の音楽マネージメント事務所に勤務。退職した翌年起こった東日本大震災で、被災地支援のため手作りのケーキとコーヒーを持参し、カフェコンサートをスタート。宮城県、福島県、熊本県で開催、現在は石川県珠洲市で毎月行う。これまで開催した数は2,000回を超える。幼少期の芸術体験はとても重要と考え、アート・音楽・ダンスをいちどに体験しながら新進気鋭の若手アーティストと子どもたちが協力しあい、独自の作品を創作するプロジェクト「子どものためのわくわくワークショップ」、「親子で楽しむ子ども食堂とアート体験」、学校に行けない病気の子どもたちの希望に合わせてプロのアーティストが個別授業を行う「子どもホスピス芸術学校」にも取り組む。さらに若手アーティストが音楽やアートを通して地域コミュニティを活性化する活動は、若手アーティストの人材育成の場にもなっている。2015年からオーストラリア政府公認のアートパフォーマンス団体・ポリグロットシアターと連携、今年7月大阪万博のオーストラリアパビリオンで芸術ワークショップを披露した。「芸術をもっと身近に」を合言葉に明るい社会づくりに貢献している。

(推薦者：NPO法人 游風 事務局長 竹林 昌代)

この度は第64回社会貢献者表彰という大変栄誉ある賞を賜り、心より御礼申し上げます。受賞された皆さまの活動はどれも胸を打つものばかりで、その場にご一緒できたことを大きな励みとして受け止めています。

認定NPO法人あっちこっちは2011年に設立し、来年で15年を迎えます。ここまで継続できたのは、素晴らしいアーティストの皆さん、支えてくれるスタッフや役員、そして関わってくださった多くの方々のおかげです。

私たちは発足当初から、芸術を通じて社会に寄り添う活動を続けてきました。音楽家・美術家・ダンサーなどプロのアーティストと共に「あっちこっち」へ出向き、日常の中で芸術に触れられる機会を届けています。特に若手アーティストには、社会貢献に関わるきっかけと実践の場を提供してきました。

活動の柱の一つが「被災地でのカフェ・コンサート」です。東日本大震災の宮城・福島、熊本地震の益城町、そして現在は能登半島地震で大きな被害を受けた珠洲市に伺っています。横浜のボランティアと手作りのお菓子や淹れたての珈琲を用意し、交流を大切にしながらコンサートを毎月開催してきました。14年続ける中で、音楽が心を癒し、明日への力につながることを強く実感しています。

この経験を起点に、子ども食堂でのアート体験や、学校に行くことが難しい病児に向けた「こどもホスピス芸術学校」など、芸術を通じた多様な活動を広げてきました。どの現場でも、状況に応じてどんな体験が最適かをアーティストと丁寧に相談し、一つひとつのプログラムを創り上げています。

日本では芸術の社会的価値が十分に認識されているとは言えませんが、私たちは芸術が人の心を動かし、社会を豊かにする力を信じています。若手アーティストが社会

貢献に関わる機会をさらに広げ、芸術が社会の中で活かされるプラットフォームを大きくしていきたいと考えています。

「音楽とアートで笑顔」をモットーに、これからも心を込めて活動を続けてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。



▲子ども食堂とアート体験_ダンス



▲国際交流事業_南三陸町小学校



▲こどもホスピス芸術学校リモート授業



▲能登半島地震被災地支援カフェ・コンサート珠洲



▲こどものためのワクワクワークショップ_2017



▲アーティストが学校へ事業

NPO法人 トラストサルン釧路



理事長
黒澤 信道

北海道

北海道の国立公園で、面積約22,000ha、山手線の内側の3倍以上の広さがある日本最大の湿原、釧路湿原の保全を目的に、1988年から活動する市民参加型団体。会員数は約200名。今年36年を迎えた。この湿原にはシンボルの特別天然記念物「タンチョウ」を始め「キタサンショウウオ」が生息している。国立公園に指定された当時、指定地域以外の丘陵地ではリゾート開発や森林伐採により自然林の消失が進んだことから、自然愛好家が集まり、寄付を募ってわずかな土地を地主から借り、ナショナルトラストの草分けとして自らの手による保全活動を開始。国立公園から外れた湿原の平坦な土地は、ソーラーパネル建設のターゲットとして狙われやすく、寄付金で土地を買い取ったり、土地の寄贈を受けたり、地主と保全協定を結んだりして保護地を拡大している。現在その範囲は80箇所、677ヘクタールに及ぶ。取得した丘陵地の水源林再生では、地域の遺伝的特性を大切に、植える苗はあ、地元で採取した種を苗に育ててから植えるといった手間と時間のかかる作業を丹念に継続している。

この度は、貴財団の社会貢献者表彰をいただきましたこと、心より感謝申し上げます。

釧路湿原は時代の移り変わりとともに様々な開発の危機にさらされています。戦後は、農地や住宅地へと開発され、リゾートバブルの最盛期には、湿原や周辺の丘陵地にはゴルフ場や工場の開発計画がありました。現在では、メガソーラー開発といった危機があります。

その中で、湿原を谷地とよび、役に立たない土地と呼ばれていた時代からも、湿原を大切な土地として守ろうと立ち上がった人々がいました。絶滅したとされていたタンチョウの住む土地を天然記念物とし、さらに釧路湿原と名を付けました。その釧路湿原は、国立公園として保全されることとなりました。

しかし、公的機関のみでは釧路にある湿原の全体を保護することはできず、湿原の水源となる周辺丘陵地や国立公園の範囲とならなかった湿原は開発の波にさらされていました。トラストサルン釧路は、1988年に釧路湿原とその周辺に民間で自然保護地を作ることを目的に発足しました。当時はリゾートバブルの最盛期で、周辺にはゴルフ場を始めたくさんの開発計画があり、ナショナル・トラストの方法で市民から寄付を集めて保護するために土地を取得することにしました。幸い現在までに土地取得資金のためのご寄付は3,700件を超え、84か所合計680ヘクタールの保護地を持つまでになりました。

時代とともに変わる湿原開発の危機に対して、ナショナル・トラスト活動を37年間愚直に続けてきたことで、現在のメガソーラー開発の危機に関して、わずかな土地ではありますが先手を打って貴重な動植物の住む土地を守ることができています。これらは寄付や土地の寄贈をされた方々によるご支援があつての成果です。また、道東地域に関わる公的機関の皆様のトラストサルン釧路の土地取得に関わる協力体制があるということも大きな力となっています。

今後もどのような時代、どのような開発危機があっても、当会、行政、市民の皆さんが一体となって釧路湿原を大切にしようという思いをつなげていくよう活動してい

きたいと思います。

今回の貴財団からの社会貢献者表彰受賞は、当会のみならず釧路湿原に関わる地域の受賞として共有させていただきます。地域を代表し厚く御礼申し上げます。



▲10号地54haは湿原を見下ろす丘陵地



▲2024年 春の植樹祭「湿原再生の森づくり」



▲苗は地元で採取した種子から育てている



▲2024年 秋のどんぐり記念日集合写真



▲湿原を潰して造られたメガソーラーの視察



▲室内の学習会で発表



▲木道から保護地の視察



▲コッタロ水源林保護地203haは当会最大の面積

年度別表彰分野・受賞者数の実績

年／回 分野	1回	2回	3回	4回	5回	6回	7回	8回	9回	10回
	昭46	47	48	49	50	51	52	53	54	55
人命救助等	93	203	156	157	213	197	235	255	230	183
国際社会への貢献										
青少年育成・スポーツの振興	14	21	33	101	111	95	97	81	75	76
社会福祉への貢献	62	58	82	149	140	200	149	114	102	119
文化の振興				3	7	11	5	9	11	11
地域社会への貢献	14	18	12	14	26	19	20	15	12	14
運輸交通への貢献	23	15	16	24		43	66	57	55	52
その他	34	35	87	97	114	95	105	135	139	105
小計	240	350	386	545	611	660	677	666	624	560
開催日	3/23	11/10	10/26	9/26	12/10	11/5	11/8	11/7	11/7	11/21
式典会場	①ホテルニューオータニ					②笹川記念会館				

年／回 分野	11回	12回	13回	14回	15回	16回	17回	18回	19回	20回
	昭56	57	58	59	60	61	62	63	平元	2
人命救助等	195	208	177	198	274	193	106	127	89	98
国際社会への貢献										19
青少年育成・スポーツの振興	81	93	89	78	92	117	22	24	26	26
社会福祉への貢献	95	112	124	109	104	103	38	38	46	57
文化の振興	16	13	17	20	19	12	9	7	13	8
地域社会への貢献	15	12	12	15	8	13		3	7	11
運輸交通への貢献	42	40	38	45	35	31	55	54	69	76
その他	96	95	104	94	86	56	57	48	39	10
小計	540	573	561	559	618	525	287	301	289	305
開催日	11/5	11/30	11/16	11/6	11/20	11/21	11/10	11/8	11/8	10/9
式典会場	②笹川記念会館									

年／回 分野	21回	22回	23回	24回	25回	26回	27回	28回	小計 (1～28回)
	平3	4	5	6	7	8	9	10	
人命救助等	101	82	34	15	47	21	27	16	3,930
国際社会への貢献	13	17	14	4	8	5	5	6	91
青少年育成・スポーツの振興	40	54	44	29	22	25	28	32	1,626
社会福祉への貢献	64	75	68	28	36	37	34	42	2,385
文化の振興	11	15	10	3	8	10	10	12	270
地域社会への貢献	12	9	4	7	14	20	19	19	364
運輸交通への貢献	83	80	49	18	14	18	16	20	1,134
その他	13	7	7	0	0	0	0	0	1,658
小計	337	339	230	104	149	136	139	147	11,458
開催日	11/7	11/5	11/1	11/7	11/1	11/12	11/13	11/9	
式典会場	②笹川記念会館		③ホテル海洋			④東京全日空ホテル			

分野	年／回	29回	30回	31回	32回	33回	34回	35回	36回	小計 (29～36回)
		平11	12	13	14	15	16	17	18	
第一部門 緊急時の功績		6	5	6	8	5	4	5	2	41
第二部門 多年にわたる功労		14	15	11	12	13	11	11	18	105
第三部門 特定分野の功績			4	7	8	8	11	9	9	56
(海の貢献賞)				(2)	(1)	(3)	(3)	(4)	(2)	(15)
(国際協力)			(2)	(2)	(1)	(0)	(2)	(0)	(0)	(7)
(ハッピーファミリー)			(0)	(0)	(2)	(1)	(3)	(1)	(2)	(9)
(21世紀若者)			(2)	(3)	(4)	(4)	(3)	(4)	(5)	(25)
こども読書推進賞						3	3	3	3	12
小計		20	24	24	28	29	29	28	32	214
開催日		11/10	11/22	10/29	11/19	11/4	11/15	11/16	11/20	
式典会場		④	①	④東京全日空ホテル						

※平成11年度より一般からの個人推薦を受付。 ※平成11年度より表彰分野別功績内容を、部門別功績内容とする。

※平成12年度より第三部門を新設、テーマを持った特定の功績に対応する

※平成15年度よりこども読書推進賞を新設する。

分野	年／回	37回	38回	39回	40回	41回	42回	43回	44回	45回	小計 (37～45回)
		平19	20	21	22	23	24	25	26	27	
人命救助の功績		9	13	11	11	8		3	9	0	64
社会貢献の功績		33	35	34	34	39		36	35	47	293
特定分野の功績 (海の貢献賞)		1	2	3	5	2		2	0	0	15
海への貢献の功績									3	2	5
こども読書推進賞 表彰式：6/26 会場：虎ノ門パストラル		1									1
東日本大震災における 貢献者表彰 表彰式：5/1 会場：帝国ホテル							128	12			140
小計		44	50	48	50	49	128	53	47	49	518
開催日		11/13	11/17	11/24	11/16	11/21	5/1	11/25	12/1	11/30	
式典会場		④ANAインターコンチ ネンタルホテル					⑤帝国ホテル				

※平成19年度より分野名を変更。こども読書推進賞は最終回。

※平成24年度は東日本大震災における貢献者を表彰。

※平成26年度より特定分野の功績(海の貢献賞)は海への貢献の功績に変更。

※平成28年度より年に2回式典を開催。 ※令和2年度より人命救助の功績は社会貢献の功績に含む。

分野	年／回	46回	47回	48回	49回	50回	51回	52回	53回	54回	55回	小計 (46～55回)
		平28	28	29	29	30	30	令1	1	2	2	
人命救助の功績		9		11		11	8	4	3			46
社会貢献の功績		11	51	17	53	29	32	33	37	39	41	343
小計		20	51	28	53	40	40	37	40	39	41	389
開催日		7/1	11/28	7/21	11/27	7/6	11/26	7/22	11/25	8/24	11/30	
式典会場		⑤帝国ホテル										

資 料

年／回 分野	56回	57回	58回	59回	60回	61回	62回	63回	64回	小計 (56回)
	令3	令4	令4	令5	令5	令6	令6	令7	令7	
社会貢献の功績	40	30	29	30	30	30	30	30	30	279
小計	40	30	29	30	30	30	30	30	30	279
開催日	11/29	7/25	12/5	7/31	11/27	7/29	12/2	7/14	12/1	
式典会場	⑤帝国ホテル									

※平成28年度より年に2回式典を開催。

※令和2年度より人命救助の功績は社会貢献の功績に含む。

受賞者合計 12,858

都道府県別受賞者内訳

県名	第63回までの累計	第64回受賞者	受賞者数
北海道	671	3	674
青森県	182	1	183
岩手県	218		218
宮城県	404	3	407
秋田県	129		129
山形県	160		160
福島県	183		183
茨城県	205		205
栃木県	153		153
群馬県	246		246
埼玉県	482	1	483
千葉県	410		410
東京都	1,256	2	1258
神奈川県	650	2	652
新潟県	266		266
富山県	144		144
石川県	144		144
福井県	205		205
山梨県	136		136
長野県	203		203
岐阜県	220	1	221
静岡県	325	1	326
愛知県	332	1	333
三重県	164		164
滋賀県	102		102
京都府	226	1	227
大阪府	517	1	518
兵庫県	531	2	533
奈良県	118		118
和歌山県	145		145
鳥取県	95		95
島根県	112		112
岡山県	313	1	314
広島県	426		426
山口県	279		279
徳島県	177		177
香川県	196		196
愛媛県	153		153
高知県	76	1	77
福岡県	571	2	573
佐賀県	138		138
長崎県	272		272
熊本県	238		238
大分県	133		133
宮崎県	75		75
鹿児島県	148	1	149
沖縄県	179		179
その他	120	6	126
合計	12,828	30	12,858

※受賞者数は、当財団設立の昭和46年からの都道府県別受賞者件数の累計

※県名は、受賞者居住地の都道府県名 その他は居住地が海外

※受賞者数は、こども読書推進賞受賞者、東日本大震災における貢献者表彰受賞者も含めての累計とした数。

第64回のNPO法人Piece of Syria、NPO法人YOU&ME ファミリー、NPO法人J'One World、House of Joy、NPO法人LOOB JAPAN、NPO法人Support for Woman's Happinessは海外での活動のため、その他に含む

役員・評議員一覧

評議員

議長	増岡 聡一郎	株式会社 増岡組 代表取締役社長
評議員	井沢 元彦	作家
評議員	ロバート キャンベル	日本文学研究者、早稲田大学 特命教授 国際文学館顧問
評議員	久米 信行	明治大学 講師
評議員	徳永 洋子	ファンドレイジング・ラボ 代表
評議員	中田 ちづ子	中田公認会計士事務所 代表
評議員	吉倉 和宏	公益財団法人 日本財団 常務理事

役員

会長	安倍 昭恵	公益財団法人 社会貢献支援財団
副会長	内館 牧子	脚本家、東北大学相撲部総監督
専務理事	天城 一	公益財団法人 社会貢献支援財団
理事	浅野 加寿子	放送評論家、NHK 会友
理事	犬丸 徹郎	ベルナルドジャパン株式会社 副会長
理事	海原 純子	昭和女子大学 客員教授
理事	川嶋 舟	東京農業大学農学部 准教授
理事	近澤 守康	一般社団法人 共同通信社 国際局長
監事	中村 元彦	中村公認会計士事務所 所長
監事	三浦 雅生	五木田・三浦法律事務所 弁護士

(敬称略・五十音順)

公益財団法人 社会貢献支援財団

設 立：1971年5月1日
所 在 地：東京都港区西新橋 1-18-6 クロスオフィス内幸町801
郵便番号：〒105-0003
T E L：03-3502-0910
F A X：03-3502-7190
U R L：<https://www.fesco.or.jp>

社会貢献者の記録

2026年3月15日

発行者：公益財団法人 社会貢献支援財団

印刷：ヨシダ印刷株式会社

Supported by

THE NIPPON
FOUNDATION